

日本における読書画像と読書史

安形麻理* 石川透 上田修一 田村俊作
慶應義塾大学文学部
*mari@slis.keio.ac.jp

【抄録】 読書する人を描いた図像(読書画像)は、読書の実態を知るうえで貴重な資料である。本研究では、日本の読書画像を分析し、読書史が描き出してきた読書行為がどのように、またどの程度まで読書画像に反映されているのかを検討した。その結果、読書史による読者・読書の類型と読書画像は完全に対応しているわけではないこと、読書画像に着目することが読書行為の実態を詳細に解明するうえでの手がかりとなりうることがわかった。

1. 読書画像¹

読書する人を描いた絵画、挿絵、彫像などの図像(以下「読書画像」)は、しばしば読書史や書物史の傍証として引用されてきた。読書画像は、読書の実態を知るうえで非常に貴重な資料である。一方、全ての読書画像を読書の実態の忠実な反映だととらえると問題が生じる可能性がある。近年、欧米では読書画像そのものへの関心が高まっており、特に女性読者を描いた読書画像を対象とする研究が各地で始まっているが、日本については研究が進んでいない。

発表者らは、2006年に、西ヨーロッパの読書画像を収集・分析し、読書史研究から導いた読者・読書の類型と対照させる研究を行った²。その結果、西ヨーロッパにおいては読書史研究が描く読者・読書の類型と読書画像は必ずしも常に対応しているわけではなく、読書画像が常に同時代の読書の実態を反映しているわけではないこと、読書画像にされにくい種類の読書行為があることが明らかになった。

そこで、本研究では、日本における読書画像を研究対象とし、日本を対象とした読書史が描き出してきた読書行為がどのように、またどの程度まで読書画像に反映されているのかを検証する。そこから、読書史と読書画像との関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究手順

以下の手順で研究を進めた。

(1) 読者・読書の類型の整理

日本を対象とした読書史研究から、時代ごと

の読者・読書の類型を整理する。ただし、江戸時代より前については定説とされる読書論がない。代表的な読書論として、江戸時代については『江戸時代の書物と読書』³や『江戸時代の図書流通』⁴、明治以降については『近代読者の成立』⁵や『雑誌と読者の近代』⁶を主として用い、必要に応じてその他の文献を参照した。

(2) 読書画像の収集

読書画像を収集し、描かれている読者・読書の仕方を分析する。西洋では読書画像を集めた展覧会図録や読書画像の研究書など体系的な収集の手がかりも多いが、日本にはそうしたツールがない⁷。そこで、本研究では、網羅的収集を目指すのではなく、資料が豊富な江戸時代を中心とし、12世紀(平安時代後期)から20世紀半ばまでの浮世絵・書物(奈良絵本など)の挿絵・絵画・図録・写真などから収集した。

(3) 読書画像のデータベース化

収集した読書画像をデータベース化した。現在、データベースには西洋の読書画像も含めて1,478点を収録している。

重複や、執筆画像との区別が明らかではないもの、非常に似たテーマの画像(例えば、

| 第1表 時代別画像数 | | |
|------------|-----|----|
| 平安後期 | 6 | |
| 鎌倉・室町 | 17 | |
| 江戸 | 前期 | 45 |
| | 中期 | 93 |
| | 後期 | 38 |
| | 不明 | 24 |
| 幕末・明治 | 46 | |
| 大正 | 5 | |
| 昭和 | 21 | |
| 合計 | 295 | |

後述の兼好の読書図はサンプルとして数点の

みを収録した)を除外すると、295点となった。時代別の収集数を第1表に示す⁸。

データベースには各読書画像について、画題、画家、作成年代、所蔵機関、画像の種類や技法(絵画、浮世絵、冊子本の挿絵など)などの基本的な情報を登録した。画像分析のための調査項目としては、読書している主体の人数・属性(性別と年代)、読書対象の数・形態・大きさ、読書の場所(窓辺、野外など)、時(季節や時間など)、姿勢(立っている、座っているなど)、本の持ち方(片手、両手)、描かれている書物の数や置き方、読書の小道具などを設定した。その結果に基づき、読書の実態や、読書がどのようなものとしてとらえられているのか分析した。

(4) 読者・読書の類型と読書画像の対照

読書史から導いた読者・読書の類型と読書画像を対照させ、その関係について検討する。

3. 読書論が描く読書・読者の類型

それぞれの時代の読書や読者は画一的ではないが、おおまかな時代区分と読者層は、以下のように類型化することができる。ただし、江戸時代よりも前については、現存する資料が少ないため読書・読者像の実態の解明は進んでおらず、読書の位置付けもよくわかつていない。

平安時代には、書物を享受するのは貴族階級の男性・女性、僧侶が主であった。貴族の場合、源氏物語の記述から、女房が詞書を読み、その主人に当たる男女が絵を見て物語を楽しむという読書様式があったことが知られている⁹。また、玉上は、源氏物語の読者には、女房に読ませて聞く極めて少数の上流の姫君と、主人に読み上げるか一人で読むという形で享受する女房という二種類があったと指摘している¹⁰。

鎌倉末・南北朝期の主な読者層は公家・寺社・武家階級であった。一方では識字・文字が普及し始めたと考えられている¹¹。

江戸時代には庶民の間でも比較的高い識字率が達成されていた。貸本屋が発達し、一般の町民や遊女の間にも娯楽としての読書が普及した。上流階級では男女を問わず古典の読解およびそれを歌作などに活かすことが重視され、中流階級では貸本屋を通じて文学作品・実用書・啓蒙書が読まれ、江戸時代中期になると中

流以下の女性にも読書が広まっていった。

江戸時代後期になると中・小型の安価な娯楽読み物(洒落本や黄表紙など)が現れ、貸本屋を経由せずに、直接読者に販売された。また、自分で文字が読めなくても読み聞かせてもらうという読書様式も存在した。

明治時代になると、活版印刷の普及により、均一的な読書から多元的な読書へ、共同体的な読書から個人的な読書へ、音読から黙読へ、精読(反復的な読書)から多読(消費的な読書)へ、という変化が起こり、“近代読者”が成立了。また、女性や労働者にまで読者層が拡大し、新聞・雑誌の読書が始まり、知識人と大衆という二極化した読者層が現れた。

昭和に入ると識字率の向上や円本の登場により、読者層はさらに拡大した。

4. 読書画像の調査結果

4.1. 読書主体

読書主体は、男性124件、女性181件だった(男女両方が描かれている場合があるため、合計は295件よりも多い)。女性のうち、33件は遊女であることが明らかである。

農民の読書画像は昭和になるまで現れない。農民に読書が普及していなかったことを反映している一方で、絵画の享受層ではないために描かれていませんといふことも考えられる。

4.2. 読書に対する意味付けと象徴

僧侶(7件)、陰陽師・易者(4件)などの読書画像の場合には、読書は実態の反映であると同時に職業的権威の象徴として描かれていると考えられる。一方、文学者と読書画像との強い結びつきは見られない。島内は、文学者・歌人の肖像画のなかで、『徒然草』の作者として有名な兼好が江戸時代以降は“ほぼ一貫して読書姿で描かれてきた稀有の文学者”¹²であると指摘している。

江戸時代、特に江戸時代中期の浮世絵には、数多くの書を読む美人・遊女が登場する。これは庶民への読書の普及を反映していると考えられるが、女性のたしなみ・教養として理想化されている面もあると考えられる。長友は、読書は知的美人の象徴であると指摘している。また、娯楽として書物を提供していることを伝

するためだと考えられる温泉宿での読書画像も見られた。

近代絵画の場合は、西洋の影響で、窓辺で読書する女性像が見られる。しかし、西洋と同様、光と影を描くために好まれた題材という性格が強く、読書の実態をそのまま反映しているわけではないと考えられる。

明らかに風刺的な意味が込められている読書画像は、江戸時代までは見られなかつた。大正時代末期・明治時代には、雑誌に耽溺し、書物に過度に依存する女学生への風刺が現れる。

4.3. 読書の場所

読書の場所は室内が多く、野外での読書は24件のみで、そのうち明治期以降のものが10件だつた。江戸以前の画像のうち、5件は象や魚に乗っている女性（見立て図）や化け物の読書など、明らかに空想的な画像であつた。

4.4. 読書の姿勢

日本では古くから様々な姿勢での読書が行われていたことが明らかになつた。座っている姿勢が多いが、立っているものが29件（うち20件は江戸以前）、歩いているものが3点（うち2点は江戸以前）あつた。

日本独自の読書の姿勢として、正座したまま上体を伏せて肘をついて読書する「正座前のめり」とでも呼ぶべき姿勢がある。これは従来、くつろいだ姿勢として言及されているものの、あまり注目されてこなかつた姿勢であり、特に名前がついていない。しかし、江戸時代・明治時代の読書画像の23件に共通して見られる姿勢であり、検討すべきだと考えられる（第2表）。23件のうち男性は4件であった（江戸中期に1件、江戸後期に3件）。また、その際の状況に着目すると、一人で読んでいるものは8件、人と一緒にいるものは15件であった。

第2表 時代別の「正座前のめり」読書画像数

| 江戸前期 | 江戸中期 | 江戸後期 | 江戸（時期不明） | 幕末・明治 |
|------|------|------|----------|-------|
| 5 | 7 | 6 | 3 | 2 |

立膝という姿勢は16件見られた。2件が男性で、あとは女性の読書画像であった。ほかにも肘をついたり、胡坐をかいたりと、くつろいだ姿勢の読書画像が多く見られた。居眠りを描いたものも4件あつた（男性1件、女性3件）。

一方で、机の前に端座する読書画像は7件と少ない（江戸まで3件、江戸1件、明治3件）。

5. 読書史との関連

5.1. 音読・朗読と黙読

明治期に基本的には音読から黙読へという変化が見られたことは指摘されているが、それ以前の時代については定説がない。読書画像では、口を開けているなど音読・黙読の区別が明示的に示されていることは少ない。西洋のように家長が家族に読み聞かせるという形式のものはあまり見られない。一方、女性同士などの読み聞かせや、母親による教育も見られる。

人と一緒に読んでいる90件のうち、明治より前の65件に注目すると、13件では複数の人間がそれぞれ別々の本を見ている。また、5件では背後からのぞき見している人物が描かれている。こうした画像は、複数の人物がいることが必ずしも音読・朗読を意味するとは限らないことを示唆している。こうした画像を収集し分析することで、読書の実態をつかむ手がかりが得られると期待できる。

5.2. 女性の読書

明治より前には女性の読書そのものに対する警戒の表現は見られず、教養やたしなみとして好意的に描かれている。画像を分析する際には絵画・書物の享受層についても考える必要があるが、基本的に支配者層の男性が注文・享受していた平安時代のものでも同様であった。西洋では、理想の読者としてのマリア像でも警戒や社会通念との葛藤が見られたのとは対照的である。

5.3. 読書の様式

精読と多読という読書様式を、描かれている本の数に着目することによって検討した。

複数の本が描かれている画像は52件であった。

第3表 複数の本が描かれている画像数

| | 江戸まで | 江戸時代 | | | | 幕末・明治 | 昭和 |
|----|------|------|----|----|----|-------|----|
| | | 前期 | 中期 | 後期 | 不明 | | |
| 男性 | 3 | 5 | 4 | 3 | 3 | 4 | 2 |
| 女性 | 0 | 11 | 10 | 6 | 2 | 3 | 0 |
| 合計 | 3 | 15 | 13 | 7 | 5 | 7 | 2 |

第4表 複数の本の置かれ方

| | 江戸以前 | 江戸時代 | | | | 幕末・明治 | 昭和 |
|----|------|------|----|----|----|-------|----|
| | | 前期 | 中期 | 後期 | 不明 | | |
| 合計 | 3 | 15 | 13 | 7 | 5 | 7 | 2 |
| 男性 | 整然 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 2 |
| | 乱雑 | 2 | 1 | 3 | 2 | 3 | 0 |
| | 小計 | 3 | 5 | 4 | 3 | 4 | 2 |
| 女性 | 整然 | 0 | 4 | 4 | 2 | 1 | 0 |
| | 乱雑 | 0 | 7 | 6 | 4 | 2 | 1 |
| | 小計 | 0 | 11 | 10 | 6 | 3 | 0 |
| 全体 | 整然 | 1 | 8 | 5 | 3 | 2 | 2 |
| | 乱雑 | 2 | 8 | 9 | 6 | 5 | 1 |

第3表に、時代別の数と読書主体（男女の別）を示す。なお、男女が一緒に読書している画像はそれぞれ1件ずつと数えている。女性のうち、江戸時代初期では4人、中期では2人、後期では1人が遊女だった。第4表には、そのうち本が整然と置かれているものと、重なり合っていたり向きが斜めであったりなど乱雑に置かれているものの数を示した。乱雑に置かれている場合、くつろいだ姿勢をとっている読書主体が多い。

くつろいだ読書の多さ、端座しての読書画像の少なさからは、前者が好んで描かれたということはあるにせよ、日本では古くから多様な形での読書が行われていたことが確認できる。

5.4. 描かれにくい読書

煙草を呑みながらの読書や（16件）、飲み物を傍らに置いた読書、炬燵に入っての読書など、行儀が悪いとされる読書は描かれている。一方、食べ物をとりながらの読書は、画像としては少ない。実態はあると予想されるものの、描かれにくい類の読書であると考えられる。

6. 結論

日本の読書画像の分析からは、読書史研究から明らかになっている読者・読書の類型と読書画像は、西洋と同じく、必ずしも常に対応しているわけではないことが明らかになった。

西洋の読書画像の分析結果と比較すると、読書の場所や姿勢、集団での読書、女性の読書の描かれ方などに差があったことから、読書画像を解釈するうえでの留意点を確認することができた。

一方では、古くから多数の書物を乱雑に広げ、

くつろいで読んでいたということがわかる。本研究の結果からは、これまであまり着目されてこなかった読書画像における書物の描き方や読者の肉体的な姿勢に着目することで、必ずしも均質ではない読書行為、特に、くつろいだ姿勢で行われる規範的ではない読書の実態を詳細に分析することが可能になると期待できる。

また、近世以前の読書の実態を解明するうえで、読書画像の分析が有効であるという示唆が得られた。今後は、さらに読書画像の収集に努め、読書の実態の解明に寄与したい。

注・引用文献

- 1 本発表は、2007年度慶應義塾大学学事振興資金による研究の成果の一部である。
- 2 読書史の中の読書画像. 第54回日本図書館情報学会研究大会. 2006年10月21日. 第54回日本図書館情報学会研究大会発表要綱 p. 73-76. また、本研究グループの既往研究に基づく次の文献がある。田村俊作編. 文読む姿の西東. 東京, 慶應義塾大学出版会, 2007, ii, 218, 12p. (以下、「文読む姿」)
- 3 長友千代治. 江戸時代の書物と読書. 東京, 東京堂出版, 2001, 7, 396 p.
- 4 長友千代治. 江戸時代の図書流通. 京都, 佛教学院通信教育部: 思文閣出版, 2002, ix, 310, 5p.
- 5 前田愛. 近代読者の成立. 東京, 有精堂, 1973, 310p.
- 6 永嶺重敏. 雑誌と読者の近代. 東京, 日本エディタースクール出版部, 1997.
- 7 読書している人物のスケッチ集として次の文献があるが、現代の画像であるため今回は対象としなかった。林哲夫. 読む人. みずのわ出版, 2006, 182p.
- 8 江戸時代の読書画像の多くは、仏教学院の長友千代治先生からご教示いただいた。
- 9 石川透.“日本における読書画像”. 文読む姿, p. 34.
- 10 玉上琢屋彌.“源氏物語の読者”. 源氏物語音読論. 東京, 岩波書店, 2003, p. 223-252.
- 11 綱野善彦.“転換期としての鎌倉末・南北朝期”. 東京, 岩波書店, 2007, p. 186-7.
- 12 島内裕子.“本を読む兼好”. 文読む姿, p. 49.